



TITLE:

東亞の新體制について

AUTHOR(S):

石川, 興二

CITATION:

石川, 興二. 東亞の新體制について. 經濟論叢 1941, 52(5): 583-598

ISSUE DATE:

1941-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/131534>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第 卷二十五第

月五年六十和昭

論叢

經濟學論の一節

文學博士 高田保馬

國家購買力と國民購買力

經濟學博士 谷口吉彦

信用の生産性

經濟學士 中谷實

支那中央銀行に關する二三の建議

經濟學士 徳永清行

時論

東亞の新體制について

經濟學博士 石川興二

研究

ナチスの農業勞働政策

經濟學士 中川與之助

ハルムス世界經濟學の政治的意味

經濟學士 松井清

說苑

北京市商會の同郷性

經濟學士 澤崎堅造

ピギー戰時財政とインフレーション

經濟學士 三谷道廣

附錄

彙報

外國雜誌論題

東亞の新體制について

石川 興 二

一 東亞の全體主義體制と資本主義體制

日本は東亞の大陸に接近せる島國としてその歴史的發展は、これとの關係をはなれては考へ得られない。而してその最初の關係は、この文化大陸より諸文化を受け入れて自分の文化的發展を催進して行くことであつた。若し日本が南洋諸島等の如くにこの大陸より距つて居たならば、大陸より文化を受け得ず従つて永く未開狀態に止まつたであらう。また日本が朝鮮半島の如くにこの大陸續きであつたならば、大陸より武力的に侵略される機會が多く従つて獨自の發展を遂げることが困難であつたらう。然るに日本は世界に於て最も古くより文化を有せるこの大陸に接近せる位置にあり、而も島國であつたが故に、早くこの大陸を通じて印度、支那等の世界的文化を受け入れ、而も大陸よりの武力的侵略は島國としてこれをよく防ぐことが出来、かくて大陸より取り入れたる文化を自己に同化しながら獨自の歴史的發展を遂げ得たのである¹⁾。

この時代に於ては、東洋と西洋とは、文化圏を異にしたのであつて、西歐の中世に於ては意志的なゲルマン民

1) 第二篇第一章參照。

族が主體となつて膨大な封建的秩序としての神聖ローマ帝國を建て、東亞に於ては意志的な帝王文化の盛んであつた支那が主體となつて膨大な天下國家を打ち立てたのである。即ちこの支那の帝王は四方を征服して大なる帝國を形成しその帝王文化を誇り周圍の民族をして朝貢せしめ自分を中華と稱して尊大に構へたのである。これが東亞の封建的秩序であつた。

然るに近世に於て資本主義的に勃興し來れる西歐諸國の帝國主義的侵略は次第に東亞に進み來つた。かくて東洋と西洋とは一體の人類社會を形成するに至り、こゝに資本主義的世界秩序が成立したのである。即ち本來その自然が狭小であり而も今や資本主義的に發展しはじめたる白人諸國は、その生産の爲めの資源の供給地としてまたその製品の爲めの市場として、それを海外に求め東亞にまでも進出し來つたのである。かくてこの世界の新秩序に於て今や主體的地位に登れるものは、白人であり殊に最も市民主義的な性格を有する國民としてのイギリス國民であつた。今や白人は自己の經濟的利益を究極目的として（目的因）、物資豊かな東洋の自然と尙ほ文明の低き東洋の諸民族とを自己の資本主義經濟の物的並に人的素材として（素材因）、白人を搾取階級とし東洋の諸有色民族を被搾取階級とするところの資本主義的秩序を（形相因）、その資本主義的經濟力とこれに基ける武力によつて（動力因）建設したのである。

かくて有色人種全體が白人の壓迫搾取の下に立つことが東亞全體の運命であつたが、唯だ極東の孤島日本のみは、これ等亞細亞の諸民族と運命を共にしなかつた。即ち支那が東亞に威を振へる段階に於ても元の侵入をよく防ぎ獨自の發展を遂げた日本は、此等歐米諸國の東亞侵略に對してもよくこれを防衛し、東亞の總ての國が植民地化するにも拘らず、よく自己の主體性を保持し得たのである。萬一この際日本も白人の植民地化されたとする

ならば、こゝに白人の世界制覇は完成し得たのであるが、僅に日本によつて白人の侵略の波が極東の孤島に於て蹴返へされたことは、こゝに世界史の新たな展開方向の出発點が日本によつて置かれることゝなつたのである。

この日本はやがて、日清戦争に於て支那の壓迫に對して自己の存立を圖り、更に日露戦争に於て露西亞の侵略に對し東亞の存立を確保し得たのであるが、この日露戦争に於て日本が白人露西亞に勝つたと云ふことは、これまで白人の君臨壓迫をその止むなき運命視して居た全有色諸民族全體をして、白人の搾取よりの解放の希望を始めて抱かしめ日本をその解放の指導者として仰がしむるに至つたのである。

然るに日清日露戦争の勝利により次第に資本主義的に勃興し來りかくて西歐資本主義諸國に伍し得た日本は、自己の立場を次第に白人資本主義國のそれと混同し東亞に於ける有色人種としての自覺を失ふに至つた。これと共にこの資本主義化されたる日本は東亞の諸國に對しても白人資本主義國と同じ態度を以て鑑みはじめたのである。白人の列強が悉く第一次世界大戰に参加せし時こそ、日本は東亞を白人の壓制より解放すべき時期であつたが、反對に資本主義的模倣は益々激しくなつたのであつて、東亞に於ける市場を獲得し植民地的支配を擴充することに熱中したのである。かくして日本が有色民族解放の指導者としての期待に背き白人と共に有色民族を衰退せしめ行くならば、それは恰もその兄弟を順次に倒せし賴朝が最後に野中の一本立として自分も倒れざるを得ざるに至つたと同様に、有色人種の唯一の獨立國家としての日本が遂に白人の重圍の中に亡びざるを得ざるに至ることを自覺し得なかつたのである。

二 東亞共同體の自覺

かくては明治維新に於ける日本が白人の潮を押し返すことにより更に日露戦争の勝利によつて全有色民族に抱かした解放の希望により創めたる世界史の新なる方向は空しく消え去らざるを得ないのである。これと反對に日本がこの世界史に投じたる新な方向を發展せしめ行くならば、内に天下億兆一人も其處を得ざるものなからしむるところの我が國體の本義を徹底せしむると共に外にこの國體の本義を擴充するところの萬邦各々その所を得しめんとする大精神を以て先づ東亞諸民族を白人の壓迫より解放しなければならぬのである。これが即ち「大に皇基を振起する」所以であつて、またこのことによつてのみ日本は自己をも萬歳の安きに置くことが出来るのである。この日本の眞の自覺は、支那事變の苦難を通じてはじめて發展したのであるが、昭和十三年十一月三日の近衛聲明により最も明に公的に表見せられた。而してこの聲明は今日尙ほ東亞新建設の指導原理として重んぜらるべきところのものである。

この聲明はこの明治節に當り「明治天皇の御徳を偲び奉り、天皇の御遺業たる東洋平和の確立」を究極目的とするものである。即ち「わが皇室の御軫念あらせられるところは常に東洋永遠の平和確立に存する」のである。この爲めに「日本の眞に冀望するところのものは……支那の興隆……支那との協力にある」即ち「日本は東洋人としての自覺に目覺めたる支那國民と相携へて、眞に安定せる東亞の天地を築かんことを欲する」ものである。「等しく東亞に相隣りする日本と滿洲と支那との三大國が、各自の個性を存分に活かして、東亞保全の共同使命の下に堅き結合をなすべき關係にある」のである。「從來支那の天地が帝國主義的野心に基づく列強角逐の犠牲となり、つねにその平和と獨立とを脅威せられ」たのであるが、「日本は今日以後かくの如き事態に對し、根本的修正の必要を認め、正義に基づく東亞の眞の平和體制を確立せんことを要望するものである。」更に進んで曰く

「國際正義をして一個の美文たらしめず、通商・移民・資源・文化等の人間生活の各部門に及びこれを綜合したる見地に立脚し、現實に即應しつゝ、歴史の發展に併行する新平和體制が創造せられねばならぬ」と云ふて居るかくしてこゝに東亞より進んで更に世界の「新平和體制」の主張がなされたのである。要するにこれまでの東亞の體制は白人を主體とし有色民族を被搾取階級とする白人の植民地的秩序であつたが、今や日本を中心とする東亞諸民族が主體となつて東亞の新體制を建設しなければならないことが世界に向ふて公的に聲明されたのである。

この聲明は昨年八月廿八日の國內新體制の近衛聲明と密接なる聯關にあるものである。即ちこの國內新體制聲明の初めに於て「支那事變の處理を完遂するとともに進んで世界新秩序の建設に指導的役割を果すためには國家國民の總力を最高度に發揮」するを必要とし、更にこの爲めには「あらゆる國家國民生活の領域における新體制」の基底として「わが國體の本義」に即するところの「萬民翼贊の國民組織の確立」が必要であることが高調されてゐるのであるが、昭和十三年十一月の世界ことに東亞「新平和體制」聲明には既に次の如くに述べられてゐる。即ち「日本の消長發展が常に國體に對する自覺と相併行することは、日本歴史が如實に證明する所」である。更にその結びに曰く「新しき東亞建設を擔當すべき日本は、その國民生活の全分野に於て、新しき創造の時代に入つたのであります。この意味に於て、眞の戰は今始つたのであります。眞に偉大なる歴史的國民たらんがためには、吾々は上下一致堅き信念と決意とを以て、内外の整備建設に邁進しなければならぬのであります」。かくて國內新體制聲明はこの東亞「新平和體制」聲明の一貫せる發展であり、その實現の爲めの根本條件についての聲明であると云ふことが出来るのである。かくて今日日本が建設しなければならないところの内外の新體制は、この二つの近衛聲明によつて公的に表明された。それは要するに天下億兆一人もその所を得ざるものなから

しめんとする我國體の本義の徹底に外ならないのである。

三 東亞共同體の根本構造と日本を中心とする其實現

かくて今や日本が中心となつて建設すべき東亞の新體制なるものは、全體主義的なものであつてはならない。即ち嘗て支那が主體をなして権力的に支配して居た天下國家の支那に今日本が代つたが如きものであつてはならない。またそれは資本主義的なものであつてはならない。即ち今日白人が主體をなしてゐる有色人種搾取の秩序に於ける白人の地位に日本が代つたものであつてはならない。さればと云ふて自由なる個人の自由なる連帶の社會として即ち東亞の諸民族が自由なる個人として自己の利益を主張し合ふところの社會であつてもならない。それは恰も日本の新體制の根本構造が、天下億兆一人もその處を得ざるものなからしめることを以て御天職とし給ふ天皇を中心とし奉り、總ての人々はこの天皇の御天職の實現をその能力次第に分擔し奉つて自己の職分とし、これに最善を盡くし（職分共同體）、この結果として實現するところの諸の價值によつて總ての人々が人間としての生活を享け得（生活共同體）、かくて以て天皇の御天職が遺憾なく實現されるところの「天皇を中心とする國民共同體」の如き構造を有するものでなくてはならない。¹⁾

即ち東亞の新體制は、この「天皇中心の國民共同體」の自覺に立つてゐる日本が中心となつて、天下億兆一人もその處を得ざるものなからしめんとするその國體精神を、東亞に擴充したところの共同體である。故にこの東亞共同體の根本精神は、東亞の諸民族をしてその内に於て總てのものを人間たらしむるところの國民共同體を實現せしめると共に更にこの諸の國民共同體が共同體的に結ばれることによつてそこに諸國民が各々個性を存分に

1) 拙著「新體制の指導原理」第四章日本の新體制第一節新體制の基礎構造。参照。

發揮し得るところの東亞共同體を實現することである。かくて東亞の諸國民はこの東亞共同體の根本精神の國の内外に於ける實現をその能力次第に分擔し以てその職分となし、この職分にその最善を致さなければならぬ。これが東亞共同體の職分共同體としての面である。更にこの東亞諸國民の職分遂行の結果こゝに生産せられる諸種の價值によつて東亞共同體が確立發展しこの東亞共同體に於て各國民が内に總てのものを人間的生活に高め外に各國民の個性を存分に發揮し合ひ東亞共同體全體の生活を高め得なければならない。これが東亞共同體の生活共同體としての面である。東亞共同體の根本構造は、かくの如くその共同體精神を實現する爲めの東亞職分共同體と東亞生活共同體とより成る。日本が中心となつてこれを實現し得るのである。

先づこの東亞共同體の中心をなすものは日本の共同體的精神である。「上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ホシ下忠厚ノ俗ヲ以テ上ニ奉シ君民一體」の「天皇中心の國民共同體」をその國體とせる日本は、既に述べたるが如く、東亞に位置し東亞諸民族と同様に有色人種である唯一の有力國家である。この日本がその國體精神の自覺に立つてのみ東亞の諸民族を白人の支配より解放し、これ等諸民族と共に同じくする全體としての東亞共同體を建設し得るのであり、またこのことによつてのみ白人の支配せる現代世界に於て自己の國民共同體的存在を萬歳ならしむることを得るのである。かくて日本は内に「天皇中心の國民共同體」を徹底的に實現すると共にこの共同體的精神の體現者としての日本が中心となることによつてのみ東亞共同體を確立發展せしめ得るのである。これが現代日本の重任である。

またこれを東亞の諸民族又は國民について云へば、その國民大衆は久しく國內の封建的支配の搾取の下に苦しめられ、更に近世に入りては國外より加はり來れるところの資本主義的壓迫によつて飽くなき搾取の下に非人間

的な生活に置かれてゐるのである。この國民大衆が、かゝる被搾取の状態より自分自身の力によつて解放され人間的生活に高まると云ふことは到底出來ないのである。たゞ東亞共同體の中心としての日本が、この共同體の成員としての國民大衆の生活に眞に深き關心を有し、これを搾取しつゝある白人並に各國内の資本主義的並に封建的勢力を排除し以て國內の共同體の體制を確立せしめ大衆を人間的生活に高める基礎を與へることによつてのみ、彼等は人間たる生活を享け得るのである。白人は全くこれと反對にこれ等諸民族に於ける封建的搾取勢力と結びこれを優遇しこれを利用して資本主義的搾取を續けて來たのである。これは印度に於けると同様に蘭印其他に於ける白人の常用手段なのである。これを模倣するならば、それは東亞を弱化し結局自己を亡ぼすこととなる日本は、白人と反對に東亞の大衆を味方としそれを搾取しつゝある勢力を排除し各國の國民共同體を確立せしめねばならない。而もこの國民共同體なるものゝ本質は、既に述べたるが如く、全體がそこに於てある總ての人々を生かし、總ての人々がその職分を以てこの全體に盡すところのものであるが、これが日本に於てはその國情に即して「天皇中心の國民共同體」となる。即ちこの全體と個體とは日本に於ては、日本の歴史的全體の人格化としての「天皇」に於て内面的に統一せられ、この「天皇」によつて全體と個々人との關係が人格的愛の關係となり、かくて最も具體的な國民共同體が實現するのである。日本と國情を異にする東亞の諸國民に於ては、日本と同様な構造を有する國民共同體は現はれ得ないが、而もその各々の國情に即する國民共同體が實現し得るのである。それは要するに全體を擔ふ爲政者がそこに於てある總ての國民をして人間たらしめるべく最善を致し、また總ての人々はこの全體の爲めに最善を盡すことが必要なのである。東亞共同體の中心たる日本は、これ等爲政者を助け國民大衆の爲めに闘らなければならないのである。

1) 拙著『新體制の指導原理』第34頁參照。

次に東亞の職分共同體について述べんに、東亞の諸國民は、かくの如き共同體的日本を中心とするところの東亞共同體に於てのみこれまでの白人の壓迫より解放せられ、はじめて人間としての生活を享け得るのである。故に東亞の諸民族はこの東亞共同體の確立發展の爲めに、その能力次第に盡さざるを得ないのである。これが東亞の各民族の職分である。この職分は東亞的全體的なる聯關をなして、東亞の職分共同體を形成する。例へば經濟、軍事其他の各領域について東亞諸國民の各の能力に應ずる活動が共同體的に構成されて、東亞全體の經濟、軍事其他の力が最大に發揮せられることとなるのである。日本はこのことが可能なる様に諸民族の能力を指導開發しこれを東亞全體について共同體的に組織しなければならぬ。

終りに東亞の生活共同體について述べんに、かくして各國民の職分によつて實現されたる東亞全體の各種の力が諸國民をしてその内に總てのものを人間的な生活に高め各國民の個性を存分に發揮せしめ以て東亞共同體全體の生活を高める様に用ひられなければならない。このことが十分になされる程、東亞の諸民族はこの東亞共同體の確立によつてのみ人間としての生活を享け得ることを眞に自覺し、従つてこの共同體の確立發展の爲めに自己の職分を愈々眞剣に實踐することとなる。かくてこの爲めの組織が十分に確立されねばならない。それは日本の新體制について述べたるが如く一國內の生活共同體が各地域共同體を地盤とし確立することとなるのみならず、更にこれ等諸の國民共同體を地盤として東亞全體の生活共同體が成立することとなる。かく各國民の生活共同體はこの東亞全體の生活共同體に於てあるものとして一國民單位に於ては望み得ざる程度にまで諸種の生活の必要を充足し得るのである。その結果、東亞共同體の發揮し得る力は愈々大となつて東亞共同體の根本精神が愈々十分に實現することとなる。これが即ち東亞共同體の眞の發展である。

抑も東亞新體制の究極目的は、天下億兆一人もその處を得ざるものなからしめんとする日本の國體精神を東亞に實現することにある。この爲めに先づ大衆の生活が確立されなければならないのである。故に今日あらゆる點に於て極めて低き段階にある東亞の大衆に對してこれを人間的生活に高めんが爲めの厚生政策が大規模に展開されなければならない。而して日本はこの運動の先頭に立たなければならないのである。この日本の指導する實踐こそが、日本の誠意を東亞の大衆に徹せしめ以て日本を中心とする興亞運動の基礎を確立することとなるのである。而もこれが爲めにはこの實踐が先づ日本自身に於て實現し、人間たるに必要な經濟財、醫療、教育の實質的機會均等が國民大衆に興へられなければならない。日本が如何に興亞を叫ぶも自國內に多くの人々が生活に窮するが如き有様では、眞に東亞諸民族を興亞運動に動員することは出来ない。これと異なり日本の國內に於てこのことを實現し得るならば、このことが亞細亞の大衆を日本の興亞運動に動員する最大の力となるのである。この日本は、進んで東亞の諸國民の大衆生活を高める爲めにこれに生活の必需品、醫療、宗教、適當なる教育を與へる爲めに努力しなければならない。例へば今日の支那の農村生活に於ては、これ等のものは甚だしく缺乏して居るのである。故に日本は、支那の政府を助けまたは日本人の自發的な行動としてこれが爲めに努力しなければならない。かくして支那の農村生活に於て經濟上の必需品と醫療と或程度の教育と正しき司法制度とを建て得るならば、これに對する支那民衆の感謝は支那事變解決の重大原因となり得るのである。然るに事實上今日までかかることはむしろ白人並に共產軍によつてなされ日本人によつては十分なされて居ないのである。かくの如き有様では興亞運動の指導者となることは出来ない。このことは佛印、タイ其他に對して同様である。

四 東亞共同體に於ける政治經濟

日本の新體制の實現が「天皇中心の國民共同體」を主體として日本の一切の領域を再組織することにあつたと同様に、以上述べたるが如く東亞共同體を主體とすることによつて東亞の諸領域を再組織することが即ち東亞新體制の實現であるが、このことをそれぞれの領域について見よう。

政治については東亞共同體の政治組織が確立されることを要する。これ政治の東亞新體制の問題である。この爲めには、各國内に日本の新體制について述べたるが如き、共同體的な政治の新體制が確立されるのみならず、更にかゝる諸の國民共同體の共同體的統一としての東亞政治共同體が立てられなければならない。そこに於ては各國内に於けると同様に、各國民共同體を代表すべきものが各の國民共同體の總意によつて選出せられ、この各國民の人格代表が相寄つて東亞共同體議會を構成しなければならない。而して各代表者は、そこに於てはじめて各民族が人間としての生活を享け得るところの東亞共同體全體の爲めに、智を致し意を誠にして萬機を公論に決するのである。この結果が各國に於て實行せられるのみならず更に東亞共同體全體として實行されるのである。この東亞共同體の萬機を公論に決し更にこれを實行に移す爲めの組織は更に詳にされなければならない。

經濟については、各國の國內に於て國民共同體が主體となつて國民共同體經濟が確立されねばならないと共に東亞共同體が主體となつて東亞共同體經濟なるものが實現されなければならない。これはこれまでの支配的國民による権力的搾取經濟又は資本主義的搾取經濟とは異なるものであつて、先づ各國民經濟を日本の國內新體制について述べたるが如き國民共同體經濟に高めると共にこれ等諸國民の共同體經濟を更に共同體的に統一せるもの

1) 拙著『新體制の指導原理』第一編第四章第一節政治の新體制。
2) 前掲拙著第一編第四章第三節經濟の新體制參照。

である。即ち各國民單位の共同體經濟は、この東亞共同體經濟の成員として、これに於てその生産配給消費を更に完備せしむることとなるのである。

これを生産について云へば、東亞の諸民族に於て各異なる種類の自然力並に資源と勞働力と生産技術並に智識とが東亞共同體經濟の基礎的諸力として綜合的に組織利用せられ東亞共同體の必要とするところのものが最も有効に生産されることを要するのである。この際、東亞の自然は共同的一體的なるものとして東亞全體の土地計劃が立てられ、これによつて最大の効果が發揮せしめられなければならない。また生産設備について見るも、大需要に應ずる如き性質のものについては、東亞を一體的に聯關せしむる大規模の生産設備によつて最も有効な生産がなされなければならない。

これを配給について云へば、東亞全體に於て共同的に生産されたるものが、東亞全體の必要に應じて共同的に配給されなければならない。この爲めには先づ東亞全體の配給計劃が立てられることを要する。而して各國の國內生産はその國民に於ける生活消費と職分消費とに配給されるが如く、東亞の共同生産の結果は東亞を守り東亞を發展せしむる共同的職分の遂行の爲めに更にまた東亞諸民族の生活の爲めに配給されなければならない。かくて各國の國民生活は東亞共同の力によつて遂に高められ、更に東亞の共同體の職分は遂に有効に遂行されることとなる。従へばこれを軍備のみについて云ふも、白人の壓迫を退け東亞を防衛し得るに足るだけのものが整備されなければならないのであるが、この爲めに必要な經濟財が東亞の共同的生産より軍備に配給されなければならない。また各國民生活に必要なものにしてその國民に於て自給し得ざるものは、有無相通することによつて東亞の諸國民に相互に配給されなければならない。この配給設備の整備の爲めには何よりも交通機關が整備され

1) 前掲拙著第60頁以下參照。

なければならぬ。今日の東亞の交通網はこれを支那のみについても極めて不完全であるが故に東亞全體を共同體的な一體とする交通機關が整備されなければならぬ。このことは經濟上に東亞の物資を有無相通するに必要なるのみならず、更に東亞の政治、軍事其他の上に於て東亞を結ぶこととなるのであつて、この密接な結合關係が東亞の人々に對しその共同體的の意識を更に深めるところの事實上の土臺ともなるのである。

これを消費について云へば、國內新體制に於けると同様に諸種の共同消費が發展することとなる。これまでの消費は、單に國民單位であるのみならず、更にその内に於て個人主義的に分たれてゐた。共同體的に結ばれたる東亞の諸民族は、その國內に於て共同消費が發展するのみならず、更にこれ等諸國民共同體の共同體的統一としての東亞共同體に於て軍備其他大生産設備、大研究設備、學校設備、大病院設備等の形に於て諸種の共同的設備が發展する。

五 東亞共同體の基礎としての興亞學並に興亞教育

東亞共同體の確立並に發展の眞の基礎は興亞學の建設と興亞教育の徹底に置かれなければならない。上述せし東亞の政治經濟の新體制についても同様である。こゝには先づ興亞學について述べる。

東亞新體制なるものは、日本を中心とする東亞諸民族の共同體を主體とすることによつて組織される制度である。故に東亞共同體建設の學的研究に於ては、先づこの東亞建設の新たな主體たる「日本を中心とする東亞共同體」自體が究明されなければならない。即ちこの新たな主體としての東亞共同體なるものが東亞の自然、民族、歴史に於て準備されて居るものとして明にされなければならない。更にこれが哲學的研究によつて基礎付けられなければ

ばならない。かくてこれが東亞共同體建設の爲めの基礎學たるべき自然的、民族的、歴史的並に哲學的研究である。今日までの世界史並に東亞史は、これと異なり、主として白人によつて又は白人の影響の下に於て書かれたるものであるが、新な東亞史は東亞人によつて書かれねばならない。そこには本來の東亞の文化が明にせられると共に白人の東亞侵略の罪惡史も明にせられ、かくて、東亞共同體の自覺が呼び醒されなければならないのである。この東亞の眞の歴史的研究所を主臺として東亞の哲學が成立つこととなるのであるが、この哲學もこれまでは主として白人により白人の歴史的體驗の上に打立てられたところのものである。然るに東亞の歴史を歐米の歴史と對照的に眞に研究することによつてはじめてその結論として東亞の文化並に歴史の本質が明にされ、こゝに東亞の哲學が確立することとなる。かくの如き東洋の歴史的並に哲學的研究に基礎付けられることによつて東亞共同體なるものが新な東亞の主體たるべきものとして明にされるのであるが、進んでこの東亞共同體を主體とすることによつて東亞の諸領域が如何に組織さるべきかが究明されなければならない。これ東亞建設の諸科學である。これまで經濟學、政治學等と呼ばれたるものは、事實上主として西洋の歴史と哲學の上に立てられたものであるが故に、これを以てよく東亞を建設することは出来ない。東亞を眞に建設し得るところの科學は東亞の歴史と哲學との上に打建てられたものでなければならぬのである。この東亞の科學は、理論、歴史、政策よりなる實踐學であつて、そこには新體制の實現が東亞の諸の文化域について、また東亞共同體の成員としての諸國民について究明されなければならない。これを經濟學について見れば、東亞經濟學なるものは東亞共同體經濟を理論的、歴史的、並に政策的に究明するところのものであり、更にこの東亞全般の共同體經濟の立場より、この東亞共同體經濟を構成するところの諸國民の共同體經濟を理論的、歴史的、政策的に研究するものである。

かくの如き興亞學の研究を主臺とし、これを實行に移すことによつて、東亞共同體が確實に實現されるのであるが、この爲めには、先づこの興亞學を以て、東亞諸民族の指導階級となるべきものが教育されなければならぬ。こゝに興亞教育が必要となる。

この興亞教育の目的は、東亞共同體の成員としての自覺を與へ、この成員として盡すべき職分の能力を養ふことである。これまで東亞民族の指導國民たるものは多く歐米に學んだ。日本に學んだものは支那人の一部にすぎない。また支那に於ける大學は多く白人によつて經營されたのである。單に大學のみならず、教會に於ける教育より小學校、中學校の教育に至るまで白人によつて爲されてゐるものが極めて多いのである。

このことがこれまで東亞に及ぼしたる意義は東亞共同體の建設發展と甚しく矛盾せるものであることは云ふまでもない。故に日本は先づ東亞諸國民に於ける優秀なる青年を出來るだけ日本に留學せしめ日本に於て眞に東亞新建設の指導階級として教養を與へなければならぬ。このためには東亞共同體の中心たるべき日本に於て大學自體が興亞大學としての實を備へなければならぬのみならず、更にこれ等留學生の爲めに日本の國家も費用を惜んではならない。然し日本に留學し得るものゝ數は限られて居るが故に、日本は進んで東亞諸國民の重要都市に、例へば北京、南京、上海、バンコック、バタビア等に日本の經營する興亞大學を歐米經營の大學に劣らざる規模と内容に於て建設しなければならぬ。かくして東亞の諸國に於て、その國の優秀なる青年を東亞の指導階級として教育し且つ相互間の理解を計らなければならぬ。この爲めには各國に於て、日本の教育の國內新體制について述べたところの教育の實質的機會均等の精神によつて、優秀な青年が實力的に、拔擢され教育されることを要するのである。またこの各國の興亞大學の教育者としては、先づ日本の大學自體が興亞大學としての自覺

に立ちて日本人並に各國よりの優秀なる留學生の中より興亞のための研究者であり教育者たるべきものを養成しこれを各國の興亞大學に送るのみならず、日本の大學の教授自身も、東亞諸國の重要な大學との間に交換教授の制度によつて交流し、その國に至つてその國の青年に親しく接しこれを教育することが必要である。このことによつて大學教授自身も東亞の諸國に留まりその國を體驗し以て自己の興亞研究者並に教育者としての能力を高め以て日本の大學をして興亞大學としての實質をも高からしめ得るのである。

興亞の教育は、興亞學による學校教育によつてのみなさるものではなく、更に藝術、文學、宗教等によつてもなされなければならない。ことに宗教は東亞の國民大衆にとつては極めて重要な意義を有する。これ世界三大宗教は總て東洋に發したのみならず、今日東洋の諸民族は尙ほ未發展の段階にあるが故に、宗教は大衆にとつて實踐の指導原理として特に重要な意義を有するからである。この點につきてもこれまでの日本人の活動は歐米人によるキリスト教の活動に對し比較にもならぬのである。抑もこの東洋に發したる三大宗教の理想は佛教の慈悲、儒教の仁、キリスト教の愛等何れも共同體に於てはじめて實現せらるべきところの人間生活の理想である。従つてこれ等の正しき發展は、當然に今日の個人主義並に全體主義的秩序を排除し東亞共同體を確立せしむべき宗教的指導力となり得るのである。

要するに日本は東亞共同體の中心に立ち、自己の國體たる「天皇中心の國民共同體」の精神を東亞に擴充しなければならぬのである。故にこの建設の第一歩は日本自らがその國體に基く革新を徹底することである。資本主義化されまたは全體主義化されて居る日本によつてこれを爲し遂げることは不可能である。